

詩篇 134 篇

都上りの歌

《巡礼者から聖職者へ》

- 1 さあ、主をほめたたえよ。主のすべてのしもべたち、夜ごとに主の家で仕える者たちよ。
- 2 聖所に向かってあなたがたの手を上げ、主をほめたたえよ。

《聖職者から巡礼者へ》

- 3 天地を造られた主がシオンからあなたを祝福されるように。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

巡礼の最終日に歌われる詩です。120篇から十五回に亘って巡礼歌を学んできましたが、いよいよその最終回になります。エルサレムに集まった聖徒たちは、顔馴染みもいれば初対面の人も多かったことでしょう。しかし、それでいてお互いを感じ合う不思議な一体感。それはひとえに同じ主を見上げる者が集まっているからであり、神の家族としての心のつながり、霊的血のつながりを感じ取っていたからでしょう。その仲間たちともお別れの時がやってきました。彼らは帰路に着き、元の生活へと戻っていきます。翌朝出発という最終日の夜、名残惜しさに夜の街を徘徊する輩やうらもあったのでしょ。愛すべき聖都、親しみある神殿付近をうろうろしていると、夜半にも拘らず煌々と灯りが灯されているのを目にしました。よく見ると、神殿に仕える聖職者たちが翌日の聖務に備えてあれやこれやと活動しているようです。巡礼者たちが満足に礼拝できたのは彼らの見えざる奉仕のおかげであったということに気づき、思わず感謝のことばを投げかけました。

さあ、主をほめたたえよ。主のすべてのしもべたち、夜ごとに主の家で仕える者たちよ。（1節）

「主のすべてのしもべたち」とは祭司職を担う人々のことでしょう。彼らの深夜の奉仕とは、神殿の巡回、献げ物のパンの仕込みと焼き上げ、翌日の職務の割当てなど。それだけではなく、聖なる空間で祈りをささげる務めにあずかる者もいたようです。「聖所に向かってあなたがたの手を上げ」とは、祈りの姿勢を指します。「聖所」は直訳すると「聖」ですが、神の聖なる臨在の中で祈る厳粛さを思わせることばです。

通りすがりの巡礼者から受けた思いがけない祝福のことばが嬉しくて、にっこりと反応してしまう聖職者たち。彼らもまた巡礼者に対して祝福のことばを投げ返します。

天地を造られた主がシオンからあなたを祝福されるように。(3節)

これから帰路に着こうとしている人々が、エルサレム外の地においても変わらぬ祝福を受け続けるように。主の祝福は「シオン」から全世界へと流れゆく。神の臨在を象徴するこの地は、今や神と人との「新しい契約の仲介者イエス」を指すと考えてもよいでしょう。

しかし、あなたがたが到達したのは、シオンの山と生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たち、天に登録されている長子たちの大集会、すなわち教会、すべての人の審判者である神、完全な者とされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血より優れたことを語る注がれた血です。(ヘブル12:22-24)

主イエスをご自分を信じる者一人びとりに聖霊を送り、その人の内に内在されます。その人が世界のどこに居ても、この臨在は損なわれることはありません。私たちも日曜日の礼拝だけが神と共にいる時間なのではなく、常に主イエスから流れ来る祝福の川、いのちの水をいただいて生きているのです。週の六日間、どのような環境で生きていたとしても、この恵みをいつも実感して歩むことができるように、祈り深くありたいものです。